

## お盆豪雨

お盆休みの八月一四日を中心に、関東地方西部山沿い山間部を中心に広い範囲で豪雨となった。休みを利用して山仲間と甲府盆地の西にある南アルプスの甲斐駒ヶ岳へ登っていて、たまたまこの雨に遭遇してしまった。三日は昼頃まではパラパラ程度の雨だったが、山の天気の変化は下界より一歩も二歩も早く、午後になると急足に悪くなり二千<sup>ギ</sup>付近の稜線では雷を伴った横殴りの激しい雨となった。

その後も雨は断続的に降り続き、一四日朝になっても止まず、一時間二〇<sup>ミ</sup>程度と思われる驟雨性の激しい雨降りに危険を感じて、次の山頂はあきらめ早々に下山した。甲府盆地を挟んで雨が弱い所ですらこの激しさだった。

一四日の昼過ぎ中央高速道を東京に向かって走ったが、県境の笹子トンネルを越えた途端に雨が一段と強まり、ワイパーがきかないほどの一時間雨量三〇ミリを越す激しい降りで、雨水が道路に溢れ昼間なのにライトをつけて徐行せざるを得ない最悪の状態になった。

当然のごとく山梨県大月―東京八王子間が交通止めとなり、並行して走る国道など幹線道路から逃げ道のバイパスの県道町道まで、東京に向かう道はことごとく閉鎖

されてしまった。豪雨域から山一つ越えた反対側の斜面からの谷川でも、すさまじい濁流となっていた。

この豪雨の最中、神奈川県では増水した川で一八人が流されたのをはじめ、高速道や幹線国道や鉄道網も軒並み止まり、お盆の帰省客や行楽客の足が奪われた。大雨で増水した多摩川や荒川の下流でも河川敷が濁流に消えて川幅一杯の流れが今回の豪雨のすごさを物語っていた。

なぜこのような豪雨になったかという、中心の北側に強い雨雲を伴った「弱い熱帯低気圧」が関東地方西部に上陸してゆっくり北上、大雨が一日近く続いたからである。「弱い熱帯低気圧」とは、熱帯低気圧の中で、最大風速が二七<sup>ギ</sup>毎秒未満のもので、成長すれば台風となる。「弱い」というのは、成長しきつとした「熱帯低気圧」にかわりはない。

昭和五二年八月のお盆豪雨と同じで、時には大雨をもたらすこともあり、弱い惑わされないことが肝要である。逆に昭和三九年の東京オリンピックの時の直前の夏、東京砂漠の水不足解消が一つの弱い熱帯低気圧の恵みの雨で解消に向かったこともあり、被害と恵みの雨の、両刃の剣ともなる。(村松照男)